

Title	空間性に力点をおいた, 都市社会の解明のための理論研究 : 都市論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究
Sub Title	
Author	福田, 光弘(Fukuda, Mitsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.125- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

30歳になった時に何をしているかに対して、「正社員として仕事をしている」と思うのは55.9%が一番多い。

——全体のイメージとしては、被調査者の中、就職意識の形成は高校時代からの人たちが多く、自分の専攻が好きな人が少なくない。また就職の見通しに対して、わりと楽観的、具体的に仕事の選択に関する考えは現実的・確信的（フリーターを好まない、会社の規模が重視されない、面白い仕事、正社員、良い人間関係が求められる）などが多い。彼らの就職に対する親の考えはより「伝統的」（平凡だが安定な仕事）な印象がある。

——その内実はどうであろうか。質的調査を通して調べることも重要になってくる。

3. 今後の研究計画：

仮説：

- ①就職意識の実態をいうと、中日大学生ともに就職意欲が高いが、日本の大学生は定着意識が中国学生より強い。就職する際中国の学生はより「待遇」（収入・福祉など）を重視するだろう。在学中アルバイトをする比率は日本の学生のほうが高いだろう。
- ②少子少産の職業意識に対する影響経路から見れば、中国の若い人は家庭の影響が強い、これに比べて、日本の若い人はむしろ経済状況の変動、特に景気変動を通して影響を受けている。
- ③キャリア発達の段階をみれば、日本の学生に比べて、より成績重視する環境の中に置かれている中国の学生は実社会に対する認識は未熟なため、職業意識の発展、特に職業に対する認識、自らの職業に対する探索段階がより長く、生涯の職業の確立がより遅いだろう。

今後の研究では質問紙調査と面接調査を通して、以上の仮説をめぐって考察、検証、分析しようとしている。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究 都市論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究

福 田 光 弘*

昨年に引き続き第一の研究課題として、空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究を行うことをあげ、H. ルフェーヴルの思想を中心に考察を続けてきた。本年度は特に、英語圏でのルフェーヴル評価を検討することで、昨今の空間に関する議論の中心課題を見出すことに努めた。それにより、時間-空間という切り離せない二つのもののうち、私たちは時間を特権視しがちであることの根拠を考察してきた。こうした時間の特権視について、三つの点から考察する論案を立て、それにより「空間論的転回」についての一つの説明を試みた。その三つとは以下の通りである。第一に、現代社会において空間とは、近代資本主義生産様式により生産されたものであること。第二に、時間は空間を生産するさいに手段としての役割を担うこと。第三に、人々の空間にたいする認識も、空間が生産されるのと同様に生産されているということ。

第一の点から説明は、不均等発展についての考察が中心となる。空間は当初から近代資本主義生産様式のプロジェクにより不均等に形成されるという点から、容器としての空間を論じた。近代資本主義生産様式のプロジェクに依存した建造環境としての空間がもつ道具的な性格とは、主に英語圏でのルフェーヴル読解が焦点を当てる論点である。しかし、このような近代資本主義生産様式に特化した説明は経済還元主義に陥るのではないのかという批判が起こるかもしれない。それを回避するために論じたのが、近・現代世界における時間の問題である。

第二の点からの説明は、近・現代世界における時計時間の操作的性質への言及である。ここでは時計時間という単一の表象に還元されてしまいがちな、近・現代世界における時間の問題を考察することにより、不均等発展が問題を経済還元主義に陥ることを回避する。一見したところ、時計時間を世界的に制度化することは、近代資本主義生産様式のプロジェクの手段そのものように思われるかもしれない。しかしここでは不均等発展について、時間を時計時間という単一の表象に還元し、それによって空間に対する複数の表象を調整・配置する状況であると考ええる。それにより不均等とは、時間軸上の前後関係への置換であるという論点が生まれる。この論点形成により、経済的なものを担保しつつ、より広範な私たちの時間-空間関係を捉える切り口が生まれる。

こうした時間表象の単一性と空間表象の複数性という見方から、近・現代世界における時間-空間の関係性を捉えることにより、モダニティが時間の流れに沿って構成してきた物語が総じてシュミラクル(simulacra)であることが露見するという、ポスト・モダニティについての分析を注目してきた。具体的にはF. ジェイムソン、H. ハーヴェイ、E. ソジャ、P. アンダーソン、J. アーリー、S. サッセン、A. アパデュライなどの研究を参照にし、これらの論者の著作を詳細に読解してきた。

第三の点からの説明は、ポスト・モダニティについての分析を読解することで、人々の空間のみならず日常生活に対する認識をも分析するような視角を獲得することを試みた。たとえばサッセンの研究は情報技術の集中とともに形成されるグローバルシティが、新たな人的・物的な交流を作り出すなかで、いかにして従来の都市が持ってきた空間的な範囲を変容させてきたか、アパデュライの研究は人々の想像力が「ディアスポラの公共圏」の形成にどのように作用するか、さらにはアーリーの指摘する移動性の増大が人々の時間と空間に対する認識をいかに変化させてきたかなどは、現代世界における人々の日常生活を規定する条件をさまざまに提示するものである。これら近・現代世界における時間と空間の関係性に焦点を当てる研究を注目することで、空間論的転回のもつ有効性を理論的に整理してきた。それにより、人々の日常生活の意識が近代資本主義のプロジェクに規定付けられたものでありつつも、日常生活を営む空間が実体的にも想像上においても拡大していくなかで、近代資本主義のプロジェクにより生産された日常性を抜け出し、いかに新たな展開を時間-空間の中に刻み込むかということを目にした。

このことについてポスト・モダニティの文化的論理に即して語るなら、現代世界ではモダニティが構成してきた物語を、時間軸に沿って「新しさ」として語れなくなるということになる。すなわち、次々に出現する何らかのものは単に空間上に差異として表象されるに過ぎないという事態を迎えることになる。仮に実体的にも想像上においても拡大していく空間を介して出現する日常生活のなかに、何らかの差異を見出すということになるのなら、それは時間の単一の表象である時計時間を回避する隘路を穿つということになる。こうした問題関心から、昨秋に提出した学位請求論文計画書では、『空間-時間論序説—H. ルフェーヴルの思想に基づく社会理論の批判的把握を求めて—』を設定した。それは空間を全面

化することにより「社会」を記述することが、どのような可能性をもつかということを開くプランである。それは空間を焦点化する認識をとることにより、時間論的認識傾向とは異なる認識地平を構成することができるかを指摘するための思考実験であるとも位置付けられよう。それにより、グローバリゼーションという空間に重きにおいた言葉で示される私たちの自我を取り巻く状況、すなわち日常生活を描き出す予定である。

都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究、という第二の課題に関しては、昨年度までの研究で行ってきた「北東イングランドにおける日本人の文化適応」についての研究を、先述のアパデュライが指摘するような「ディアスポラの公共圏」という文脈から読み解くという構想を練ってきた。この研究の第一段階は『日本企業のイギリスへの工場進出—従業員の文化変容—』（文部省科学研究費国際学術研究 課題番号 11694035 の報告書）の第六章「北東イングランドと日本人」で「北東イングランド在住日本人の習慣・宗教体験」であり、さらに関東社会学会に於いての発表であった。

当初のところこの研究は、北東イングランドに赴任した日本人従業員とその家族たちの異文化体験に焦点を当てるものであった。異文化体験のなかで、彼らが日本での生活・経験の枠組みをどのように北東イングランドのそれらに適應させ、そうでありつつも日本的な枠組みを保持し続けるかを考察してきた。この研究では、文化的なギャップを感じる日本人像を描くことはできても、ギャップが単に日本と北東イングランドの違いであるということからしか語ることが出来なかったと思われる。極言すれば、北東イングランド的なるものと日本的なるものの本質論的なギャップという分析者の恣意的な構築物に収斂させてしまう可能性があった。今後は、彼らを感じたであろうギャップを、グローバリゼーションと人々の想像力の絡み合い中心にした論点により再考察を試みる。それにより、異文化的間交流のなかで感じられるであろうギャップを記述するにとどまらず、異文化接触をもたらした背景を含めたより動的な像を結ぶことができるのではないかと期待している。

以上と平行して、1980年代の「江戸・東京論」について同時期の東京の都市構造の変化との兼ね合いから考察するという構想を練ってきた。これについては、言説分析という考察手段以外に、何らかの分析手段を模索してきた。この点についても、想像力により形成されるディアスポラの公共圏という文脈から読み解くことで、「江戸・東京論」の顕著な特徴である、都市空間の内向きな消費の背景を探りたい。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

女子学生の食行動不適応に与える要因に関する研究

前 川 浩 子*

問題と目的

厚生労働省が行った平成13年の国民栄養調査では、肥満度の指標であるBMI (Body Mass Index) の値が18.5未満で低体重に分類される女性の割合は20年前に比べ、20代で1.6倍、30代では2.0倍に増加したことが報告され、女性のやせの傾向は高まっている。日常生活の中にも、「ダイエット」や「やせ」に関する情報があふれ、人々の関心の高さもうかがえる。しかし、このような「やせ」を好む傾